

出張報告届

令和 3 年12月20日

吹田市議会議長様

会派名 市民と歩む議員の会

代表者氏名 池淵 佐知子

出張者氏名 五十川 有香

下記のとおり出張したので届け出ます。

記

出張先	宮城県石巻市大川小学校献花台等
期間	R3年 11月 19日から 11月 21日まで 3日間
出張の成果	別紙のとおり
備考	



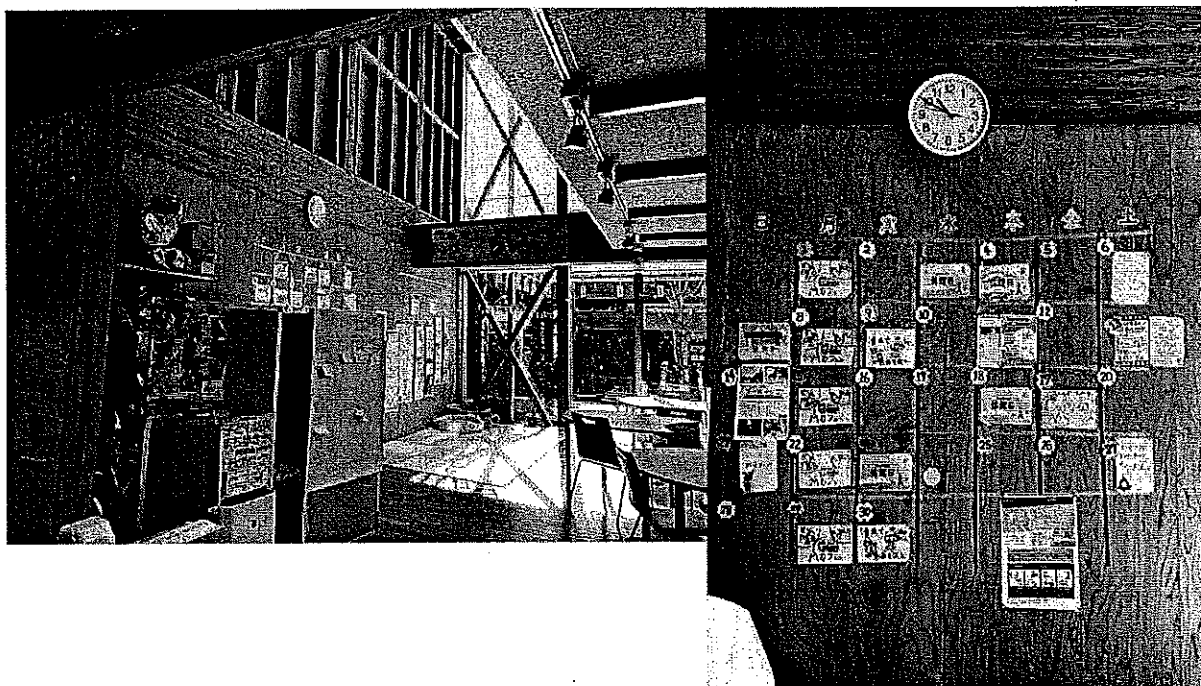
【宮城県石巻市大川小学校等の視察について】

石巻市らいつ(子どもセンター)について

<https://ishinomaki-cc.jp>

らいつとは、「石巻の活性化のために中高生が中心となってつくり、運営をする施設。みんなが過ごしやすく、子どもの想いを世間の人たちに伝えられる場所として作られ、運営されています。

設立の経緯は、震災後、外で遊ぶことが難しくこどもたちの遊び場がない状況であったこと、また、震災後に行われたセーブザチルドレンのアンケート結果から、子どもたちが、「まちのために何かしたい」と思っていたことがわかり、子どもまちづくりクラブを発足させたこと。これらのことから、子どもたちを中心に考えて作った「夢のまちプラン」を具体化する復興に向けた活動の場として企業の協力により建てられました。その後、建物は市に寄付され石巻市の児童館として運営されています。



らいつのコンセプトとして、以下、子どもセンター条例の前文より抜粋。（らいつ HP より）

「子どもは一人の人間であり、子ども一人ひとりが生まれながらに権利を持っています。子どもが幸せに健やかに成長するためには、多くのことが必要であり、子どもたちは次のように語ります。

私たちを中心に、話し合ったり、ふれあったり、交流できる場が必要です。

それにより、大人も含めた幅広い年代の人とのつながりを大切に、絆を深めることができます。みんなが楽しめて、ゆったりできる場が必要です。それにより、私たちは安心して心と体を休めることができ、笑顔が増えます。

私たちが運動できる場が必要です。それにより、体を動かして楽しく遊ぶことができ、心身ともに、健康に成長することができます。

私たちが学べる場が必要です。それにより、お互いに教え合い、考えることを好きになり、理解することの楽しさを知ることができます。

私たちが自由に社会に意見を発信できる場が必要です。それにより、自主的に活動できるようになります。

さらに、まちの未来について考えることが地域の活性化につながり、さらに多くの人に私たちのまちのことを知ってもらうことができます。

だから、私たち子どもが中心となって活動する子どものための施設をつくっていききたいです。

石巻市は、この子どもたちの想いを形にするための施設となる石巻市子どもセンターを設置することにより、生まれながらに持っている子どもの権利が尊重され、子ども一人ひとりが幸せで健やかに成長できる社会につながることを期待し、ここに「石巻市子どもセンター条例」を制定します。」

【所感】

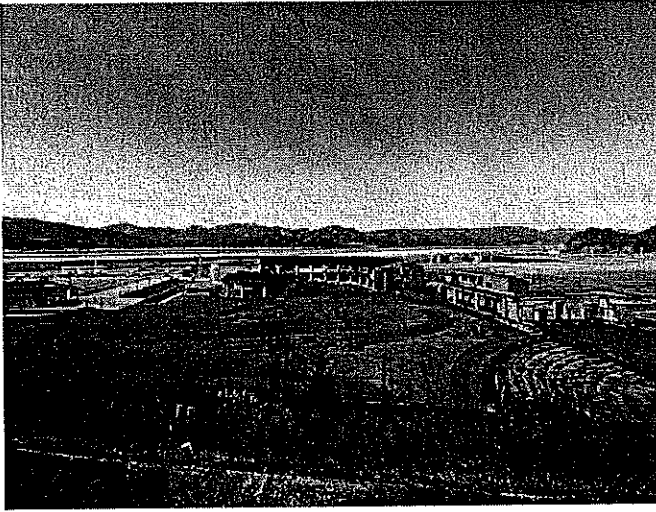
まず、建物に入ると、全体を見渡せる作り（吹き抜け等）になっていて、また、子どもたちのニーズに応えられるようなさまざまな仕掛けもあって非常に面白い空間でした。石巻市内には、児童館がここだけしかないということもあり、市内いろんなところから遊びに来られるようです。午前中は就園前のお子さんを連れた親子が多く、学校の後の時間は、小学生、夜は中高生と時間帯によってもいろんな子どもたちが使えます。子どもが中心になっていろいろなことを考え、支援が必要な場合は、その子の伴奏者として関わる関わり方など、ソフト面においても大変学び多きものでした。子どもたちにとっても子育て中の親御さんにとっても大切な居場所になっていることがお話を聞いていてよくわかりました。

また、運営においては、条例にも書かれていますが、「子どもの権利」を尊重し、子どもの参画を大切にされているので、様々なニーズをもつ、いろんな子どもたちが通う大切な居場所となっています。

吹田市においても、この施設の設立過程や子どもによる子どものための施設運営の方法等からの学びはとても多く感じられました。子供が設立のコンセプトを考える時から参画をして作り上げることで、子どもたちが建物や存在に対する想いが大きく現れることでコミュニティのつながりが広がること。このような居場所を吹田市においても子どもたちと共に作りたい。

【大川小学校震災遺構】

石巻市震災機構：<https://www.city.ishinomaki.lg.jp/ruins/index.html>



大川伝承の会の共同代表、佐藤敏郎さんと共に、小学校の正面玄関から校庭、校舎、避難しなかった裏山などの現地を辿り、津波警報が出てから津波がくるまでの約50分間の様子(当時の聞き取りをした内容等)を伺いながら体験しました。子どもたちが実際に避難を開始したのは、津波のくる1分前だったのですが、その避難先も

山ではなく津波のくる方向に向かって走ったというその1分間の様子も自分達が子どもの目線になって体験しました。

【所感】

まず、お話の初めに、校舎と校庭に向けて「よろしくお願いします。」と子ども達に挨拶をします。次に、敏郎さんの震災前の小学校での生活の様子を校庭を歩きながら聞きます。お話を聞いているにつれ、広い校庭には今でも子どもたちが遊んでいて、「いのちを真ん中に考えることで自ずと導き出される未来を共に考えていこうよ。」と語りかけてくれてることを感じ取ることができた気がしていました。

また、佐藤さんからは、同じく校舎の周りを歩きながら、災害後の現地での様子(亡くなられた娘さんや子どもたちの様子)の話をされます。そして、校庭にある壁に描かれている児童たちが書いた「絵」に描かれている言葉を引用され、「大川小学校がこのような状況となってしまった現実を教訓にしてここを『未来をひらく』場所として、一緒に向き合ってほしい。」と訴えられました。

さらには、「ここに山があっても山が命を救うものではない。山に登るという判断と訓練が必要」「時間・情報・手段を結びつける判断ができるかどうか。防災は、恐怖を煽るものではなく、(助かるための)希望につないでほしい。」というお言葉もいただきました。これらのお言葉はとても重要であり、胸に刺さりました。これらのメッセージは吹田市に限らず危機管理を考える上で欠かせないものであることを感じま

した。危機管理の本質は、「命を真ん中に」考え、行動（準備）することだということ。そのためには危機の時にその適切な判断ができるよういかに平時に準備をするかが大切。

その子どもたちの助かる命が、なぜ、助からなかったのか。その原因の本質を原理に基づいて理解し、日頃から備えることを吹田市における様々なリスク管理の場においても実践できるよう促していきたいと感じています。

また、このような考え方は、その他いろんな分野においても根本的なものとして共通するもの（組織を促して原理から生まれる本質に欠けた訓練・判断）があることも感じました。また、政策立案等にかかわる者として、自分に指を向けて、吹田市におけるクライシスマネジメントに対して、市民の命を第一に考えていきたいです。コロナ禍においても同じ考えが尊重される必要があると思います。

周辺地域

●東松島市：東松島市にて、震災後に小野駅前応急仮設住宅に住むお母さん方が復興を願いながら作ったおのくん（ソックスモンキー）のいる小野駅前の「空の駅」、震災復興伝承館、東日本大震災復興祈念公園へ行きました。

おのくんは、手作りのぬいぐるみで、購入者は里親になるというコンセプトにより、震災の記憶を風化させないことや里親同士のつながりなど、人と人のつながりを大切にした活動です。私も里親になっています。

伝承館では、当時の映像や写真、市民の方々の思いや願いが様々な形で展示されていました。案内していただいた現地の方からも当時の生き抜くために避難された様子なども深くお話しいただき、自然災害と向き合い、万が一を想定して備えること、人とつながり続けることの大切さを感じました。

●女川町：宮城県内のほとんどの地域は堤防をつくって海が見えないまちとなりましたが、海が見えるまちの再生を実現された女川町。その背景には、町民参加型の話し合い（次世代にまちの将来を託して 60 歳以下の方が中心となった）を何百回も重ねてまとめた提言書を町長や町議会に提出。これら住民主体の活動は町の復興の大きな力となったとのことでした。

また、当時中学生だった子ども達が、記録をしておかないと 1,000 年後、また同じ悲劇が繰り返されてしまう。伝え続けたい。として、町内 21 か所に浜の津波が到達した高さ地点に石碑をたて、高台への避難ルートの確保するなど「いのちの石碑プロジェクト」も実施され、私が訪れた日は最後の石碑の完成日でした。まちのあり方を自分たちで考えることの大切さや世代を超えた住民主体による活動から民主主義のあり方への希望を感じました。